

冬鳥ウォッチ 2018 年冬報告 — 2018 年の冬はアトリが多かった？—

バードリサーチ 平野敏明

2018 年の冬は、12 月下旬ごろに北海道などで大雪が降ったものの、関東などでは概ね暖冬でした。そのせいか、バードリサーチが別々実施しているベランダバードウォッチの結果では、冬鳥のツグミやシロハラの記録率が低く、個体数が少なかったことが示唆されています。では、冬鳥ウォッチの調査対象種であるアトリやマヒワ、カワラヒワなど 6 種の冬鳥たちの記録状況はどうだったのでしょうか。以下に、18 年冬の記録状況について報告します。

調査地および記録状況

18 年冬は、北海道から九州までの 23 名より合計 63 か所の調査地で各種の合計 116 件の情報が寄せられました。過去の調査と比較すると、18 年冬の調査地数は 14 年冬に次いで少なく、各種の情報件数の合計は 11 年冬に次いで少ない状況でした（図 1）。調査地の地域的な分布状況は、関東地方から東海・信越地方などを加えた東日本が 52 か所で、全体の 82.5% を占めました。北海道や東北地方からは 1 か所と、今回も少ないままでした。

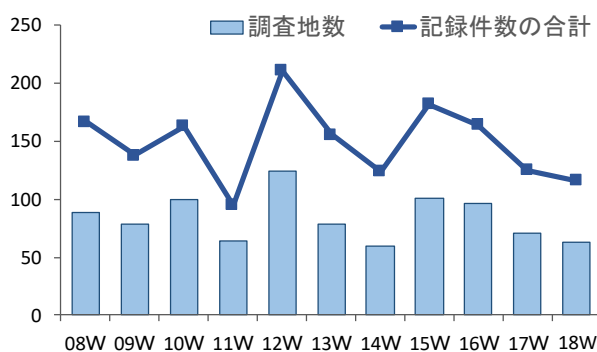


図 1. 調査地数および各種の情報件数の合計の推移

記録された種は、カシラダカとマヒワ、アトリ、カワラヒワの 4 種で、ハギマシコとイスカの記録はありませんでした。件数ではカワラヒワとアトリが多く、それぞれ 42 件と 40 件でした。カワラヒワは毎年記録件数が多く、18 年冬も同じでした。おそらく、カワラヒワは市街地などの街路樹などにも飛来するために観察されることが多いためと考えられます。一方、アトリの情報件数が多いの

は、市街地付近に出現すると観察者の目を引くため、情報件数が多くなるものと思われます。アトリの多い年には市街地付近でもアトリが記録されるようになると仮定すると、アトリの情報件数の多寡は、その年の生息状況がある程度よく表しているのではないかと思います。一方、マヒワは 13 件と少なく、データをみると山地の樹林での記録がほとんどでした。カシラダカは、国際自然保護連合のレッドリストの危急種に選定された 16 年冬に一時的に記録件数が増えたものの、その後また記録件数が減少し、18 年冬では 27 件と減ってしまいました。ハギマシコとイスカの情報がないのは、これらの 2 種はあまり人里に飛来することが少なく、生息環境が限られているために、観察者の目に留まらなかった可能性があります。本調査の入力に間に合わなかったものの、ハギマシコは数が少なかったなどの情報もあります。そのため、18 年冬では渡来数が少なかった可能性もあります。

主要な 4 種の 3 シーズンの個体数ランクの比較

16 年冬から 18 年冬のアトリ、マヒワ、カワラヒワ、カシラダカの個体数ランクを比較しました（図 2）。アトリは、17 年冬の情報件数こそ 3 シーズンの中ではやや少なかったものの、201 羽以上の大きな群れの割合が多く得られました。18 年冬は、201 羽以上のランクが 16 年冬より多かったものの、101~200 羽のやや大きな群れを合わせると、全体的な傾向は 16 年冬と似ていました。マヒワの情報件数は、3 シーズンで 16 年冬が最も多く、

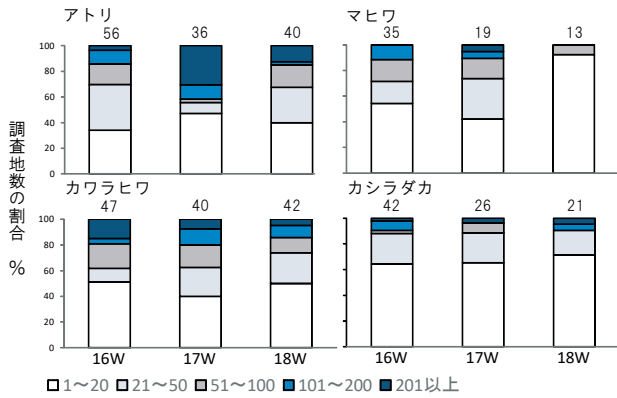


図2. 主要4種の16年冬から18年冬の個体数ランクの比較

17年冬、18年冬と徐々に減少しました。18年冬では、1~20羽の小さな群れが92%を占めました。マヒワもアトリ同様に身近な環境に飛来すると情報件数が増える傾向があります。そのため、18年冬は渡来数自体少なかったと考えられます。カワラヒワでは、この3シーズンは年による大きな変動が少ないことがわかります。16年冬は他の2年と比べると、201羽以上の大きな群れの割合がやや多くを占めました。例年、カワラヒワの大きな群れは西日本で多く記録されますが、この年は関東南部の農耕地でも1,000羽近くの群れが報告されたことによります。ただし、関東の大きな群れが記録された調査地は、この年に初めて報告された調査地でした。そのため、たまたま今回記録されたのか、毎年大きな群れが生息しているのかはわかりませんでした。カシラダカは、3シーズンでは記録された個体数ランクに大きな変動はありませんでした。ところで、本種はカワラヒワなどと違って市街地の公園などにはあまり生息しませんが、東日本などでは河川敷の灌木が点在する草原や里山の林縁の農地には比較的普通の冬鳥といえます。一方で、森林の内部ではほとんど記録されません。さらに採食のために地上に降りてしまうと見つけにくく、しかも正確な個体数がカウントしにくい鳥です。これらのことが、身近な冬鳥の割には冬鳥ウォッチで情報件数が少ない理由なのかもしれません。



公園で越冬しているアトリ (写真:平野敏明)

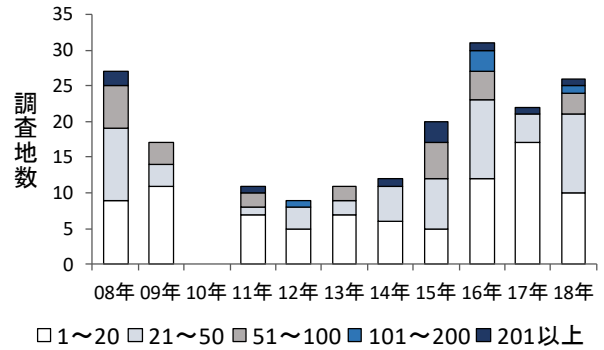


図3. 関東地方のアトリの11年間の記録状況

関東のアトリの記録状況の年変動

18年冬は、アトリの記録件数が多いことがわかりました。そこで、冬鳥ウォッチの情報件数が多かった2008年以降のアトリの記録状況の経年変動を、情報件数の多い関東地方の調査地で比べてみました(図3)。記録件数は、16年冬が最多で31件、次いで08年冬が27件、18年冬が26件でした。これらの冬は、東京都などの市街地の緑地や公園でも群れが観察されました。なお、栃木県などに巨大な群れが記録された15年冬は、情報件数からみると5番目と個体数の割に記録件数が少なめでした。おそらく、15年冬は栃木県の狭い範囲に集中したため、関東地方であっても他の地域ではあまり記録されなかったのかもしれない。群れの出現状況などをみると関東地方では、上述の08年冬、16年冬、18年冬の飛来状況が似ていたと言えそうです。

しかし、アトリの記録状況は狭い範囲でも年による出現状況は同じ傾向があるのでしょうか。そこで、冬鳥ウォッチに毎年継続して報告されている栃木県の隣接する3か所の調査地の状況を、

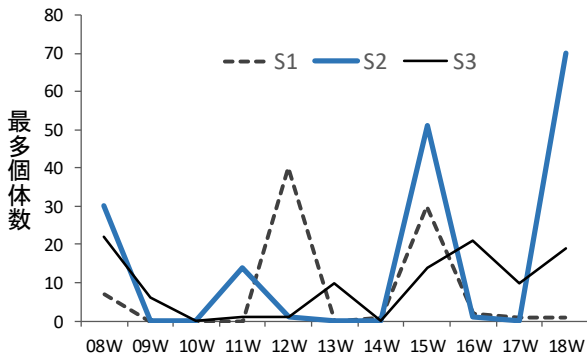


図4. 隣接する調査地のアトリの記録個体数の経年比較

実際の記録個体数をもちいて比較しました(図4)。これらの調査地では、毎年12月から2月にかけて定期的に調査が行われています。図中のS1は小規模な二次林が点在する農耕地、S2は都市公園、S3はアカマツ林からなる丘陵林の公園で、これらはすべて半径2 km以内に位置しています。これらの3か所では、アトリの群れが3か所とも記録されたあるいは記録されない冬は08年冬と15年冬および10年冬と14年冬で、それ以外の年では1か所または2か所で群れが記録されたにすぎません。このうち、3か所とも記録された15年冬は栃木県に大群が記録された年です。18年冬では都市公園のS2とアカマツ林からなる丘陵林のS3で群れが記録されましたが、S2からわずか1.5 kmしか離れていないS1では、12月から2月の約40回の調査で1回1羽のみが記録されただけでした。したがって、隣接する調査地でもアトリの記録状況は異なることがわかりました。同様の近隣地域での渡来状況の違いは、多い年には10,000羽以上が記録される四国や九州などの調査地でも得られています。このような違いは、おそらく各調査地におけるアトリの食物の多さと関係しているものと思われます。冬のアトリの食物は、ズミやアズキナシなどの樹木の果実、ケヤキやカエデ、アカマツ、ユリノキなどの樹木の種子、イネなどの草本の種子です。特に樹木の種子の豊凶は年変動が知られています。そのため、食物が多い場所に集中してしまい、少ない場所では隣接地であっても

記録されないのではないかと考えられます。これらのことから、大きな群れになるアトリやカワラヒワ、マヒワのような冬鳥の渡来状況を把握するためには、なるべく多くの場所で定期的に観察することが望ましいと考えられます。また、冬鳥の変動の要因を明らかにするためには、彼らの食物となる樹木の種子の豊凶や刈田の萌芽の状態など食物の記録をとることも必要と考えられます。

最後に

冬鳥ウォッチも14年がたち、年によるアトリやマヒワなどの飛来状況の変動が記録されつつあります。特に、アトリのように市街地の公園などにも飛来する種は、上述のようにその傾向が比較的はつきりと得られています。一方で、イスカやハギマシコなどの情報は少ないままです。特に、イスカは13年冬にやや多かったものの毎年情報が少ないままです。とすると、イスカの飛来数は減少傾向にあるのでしょうか。それとも、イスカの主要な食物となる針葉樹が多く生育する北日本や山地の情報は、積雪などのため観察者が少なく、飛来していても情報が得られていないだけでしょうか。今回の栃木県の調査地のように極めて狭い範囲でも環境の違いで記録状況が異なることがわかりました。やはり、モニタリングのためには同じ調査地で多くの調査地からの情報が不可欠です。今後とも継続した観察をお願いいたします。末尾ながら、調査に参加していただきました皆さまのご芳名を記してお礼に替えさせていただきます。

石塚文信、井上賢三郎、井上幹男、植田睦之、大井智弘、大塚啓子、加藤美奈子、木村有紀、久保賢一、小池順子、越川重治、小林俊子、近藤健一、柴田絵里、白石ひとみ、須田由美、武居佳子、多田英行、出口翔大、手塚 功、藤波不二雄、渡辺美郎の各氏。